



アルジェリア・チュニジア —文化と歴史から見る現在

(一社) 現代イスラム研究センター

理事長 宮田 律

9月にアルジェリアとチュニジアを訪問した。「私は地中海人だ」とはこれら2国でしばしば聞かれる言葉だった。白壁と青い窓枠の家々、北アフリカの情景は南欧のそれとよく似通っている。フェニキア人の商業活動、ローマ帝国の繁栄などこの地域は同じ文明体の中で発展してきた。

今年1月にアルジェリアのイナメナスのガス・プラントで日本人企業関係者たちがイスラム武装集団の人質になり、アルジェリア軍の制圧の中で犠牲となった。しかし、武装集団は日本人を狙って凶行に及んだわけではなかった。アルジェリアでは、「日本人が狙われたわけではない。標的にされたのは欧米人で、日本人は巻き添えになったのだ」という声が例外なく聞かれた。

他方で、アルジェリアでは日本企業や日本人にはもっとアルジェリアに来てほしいという発言にも数多く接した。古代ローマ帝国の版図にあったアルジェリアには多くの世界遺産があり、観光資源が豊富な国でもある。アルジェリア国内では、「イスラム過激派」の活動はほとんど見られなくなり、1月の事件はマリやニジェールなど外国人が起こしたものだという見解のほうが多かった。

また、チュニジアでは「アンサール・アル・シャリーア（イスラム法の支持者たち）」のような武装集団の活動が見られているという情報も

訪問以前にはあったが、この国も治安は安定している。カルタゴなどチュニジアの有名な遺跡には欧米人や日本人の観光客も数多く訪れていた。

以下では、文化や歴史といった観点や、また訪問した印象からアルジェリアやチュニジアの現状を紹介したいと思う。

フランスの直轄領土だった国

「ここは地の果て、アルジェリア」。昭和30年代に流行った歌謡曲「カスバの女」の一節である。この歌が口ずさまれた当時、「地の果て」と形容されるほど、日本人にとってアルジェリアは遠い国と感ぜられていたに違いない。傾斜が急な曲がりくねった街路が迷路のようにあるカスバの街はオスマン帝国の軍人の邸宅跡、モスク、イスラム神秘主義の聖人の墓廟、職人たちの工房、スーク、また公衆浴場であるハンマムなどイスラム世界の都市機能をすべて備えている。

1966年に公開された、アルジェリア独立戦争を描いた映画「アルジェの戦い」は、アルジェリアとイタリアの合作で、ベネチア映画祭の金獅子賞を受賞したが、独立戦争におけるアルジェリア人の激情が伝わってくる映画で、フランス支配から脱却したかったアルジェリア人たちの切なる思いが描かれている。この映画もカスバを中心に描かれ、カスバはアルジェリア独立

戦争を担った（民族解放戦線）の活動拠点だった。アルジェリアでは1954年から独立運動が激化し、FLNによると、100万人のアルジェリア人が犠牲になりながら、1962年にフランスからの独立を達成した。カスバは「城塞」の意味で、オスマン帝国が築いた「城塞」がその語源になっているが、1992年にユネスコの世界遺産に指定された。カスバの社会もすっかり安定しているようで、街のスク（市場）には人ばかりして、また大衆食堂にもぎわっていた。

アルジェは起伏に富んだ街で、白壁の建物はフランス様式で、フランス支配時代につくられたアルジェの中心街はさながらパリにいるかのようだ。カフェで人々は語り、憩う。カフェに集うのは男性ばかりで、そこにもイスラム社会の特徴を見る気がした。街路にはバスを待つ人々が立ち、商店街にも人があふれ、活気を呈している。

アルジェの人々が憩う場所がアルジェの植物園（ジャルダン・デッセ）だ。ジャルダン・デッセは1832年に造られ、アルジェの観光目玉の一つであり続けている。植物園は、フランス庭園、イギリス庭園、動物園に分かれる。植物園の入り口からは熱帯林の見事なアーケードが続く。1865年にフランス第二帝政の皇帝であったナポレオン3世が訪れ、その美しさに驚嘆したという。カール・マルクスは1882年に、また画家のピエール・ルノワールは1881年に訪問し、ルノワールは絵画の題材としてこの植物園を描いている。1942年11月に植物園は連合軍に占領され、軍用トラックの修理工場になったりした。1943年にはドイツ軍によって爆撃されている。1949年にはレックス・バーカー主演の映画「ターザン」のロケが行われたように、熱帯地方の雰囲気をかもし植物が群生している。

世界遺産の遺跡群

アルジェ郊外にあるティバサの遺跡はフェニ

筆者紹介

1955年山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles）大学院修了。現代中東論、現代イスラーム研究専攻。一般社団法人「現代イスラーム研究センター」理事長。静岡県立大学国際関係学部准教授。著書に『中東危機のなかの日本外交』（NHKブックス）、『紛争の世界地図』（日経プレミア）、『南アジア 世界暴力の震源地』（光文社新書）、『イスラム世界おもしろ見聞録』（朝日新聞出版社）、『中東イスラーム民族史』（中公新書）、『現代イスラームの潮流』（集英社新書）など。

キア人によって建設された港で、遺跡の目玉ともいべきフェニキア人の墓地は紀元前6世紀までさかのぼる。ここは、紀元前1世紀までにローマ帝国の支配下に置かれた。ローマ帝国統治下でティバサはその海港とともに、商業、また軍事的な重要性を高めていった。さらに3世紀になると、北アフリカのキリスト教信仰の中心ともなっている。キリスト教に関する最初の刻印は238年にさかのぼり、429年頃、ティバサはヴァンダル族の侵入に遭い、多くの住民たちはスペインに逃れ、街は荒廃していった。ティバサの遺跡には公衆浴場、フェニキア人の墓地、ローマ劇場などが含まれる。ティバサは1982年に世界遺産に登録された。

現在のティバサはアルジェリアのワイン製造の中心で、また世界遺産の遺跡を中心とする観光地でもあり、フランス人の観光客たちも遺跡の見学に来ている。

さらに、アルジェから東のコンスタンティヌスに向かうと、ジェミーラの遺跡が途中にある。「ジェミーラ」はアラビア語で「美しいもの」を表すが、古代ローマ時代の遺跡で、ここも1982年にユネスコの世界遺産に登録された。

ジェミーラは元々、クイクルムの名で西暦1世紀に建てられたローマ帝国の植民都市で、兵士たちの駐屯地から次第に商業都市として発展していった。ローマ帝国軍の兵士たちはローマ文明を普及する役割を自ずと担い、進出した先

の土地を都市化していった。ジェミーラにはローマ帝国自体に兵士も含めて1万2,000人ほどが居住していた。

アラブ・イスラム軍がこの地域を制圧したものの、入植しようとはせず、遺跡周辺の村の名を「ジェミーラ（美しいもの）」と名づけた。

ローマ皇帝の名前がついた街

コンスタンティヌスは、市の中心は歩いて回れるようなコンパクトな街で、岩盤の上に街全体が乗っかっているようで、海拔640メートルに位置し、深い峡谷の上に主な橋が4つかかっている。現在、さらに大規模な橋をブラジルとイタリアの企業が建設中である。この街もまたフェニキア人の植民都市キトラだった。地中海からおよそ80キロメートル南に位置する。都市の交通システムとしてはユニークな手段も利用されている。

ヌミディア人の軍事都市であったキトラには最盛期には10,000人の騎士と20,000人の歩兵がいた。キトラはジュリアス・シーザーの時代にローマ帝国の植民都市となり、ローマ皇帝マクセンティウスは、アレキサンダー大王とヌミディア人の掠奪者と戦ったが、街は荒廃していった。しかし、313年に街は復興し、その復興を支援したローマ皇帝コンスタンティヌス1世の名前に因んでコンスタンティヌスと名づけられた。イスラムが誕生した7世紀にアラブの征服を受けてイスラム化していく。オスマン帝国のサラ・ベイの下で現存するイスラム建築がつけられていった。フランスは多大な犠牲を払いながらも1837年にコンスタンティヌスを制圧し、その支配下に収めた。第二次世界大戦中には連合軍の軍事拠点ともなっている。

現在のコンスタンティヌスはアルジェリア第三の都市で人口は55万余り、コンスタンティヌス県の県都となっていてアルジェリアの商業の中心でもある。また、コンスタンティヌスでは

1994年に完成したアミール・アブドゥル・カーディル・モスクがその威容を誇っている。アミール・アブドゥル・カーディル（1808～1883年）は1830年に始まるフランスのアルジェリア侵入に激しく抵抗したイスラム神秘主義教団の指導者で、アルジェリアの国民的英雄だ。

コンスタンティヌスからアルジェの間にセティフという街がある。普仏戦争（1870～71年）に敗れたフランスのアルザス・ロレーヌ地方の住民たちがプロイセン支配を嫌い、移住して建設した街だ。

セティフの街もフランスの文化に倣ってつくられた、街路の並木が美しい街だ。街のシンボルの泉の水を飲むとここをまた訪れるという言葉があるそうだ。標高1,000メートル余りある街はアルジェリア人の避暑地ともなっている。街の中心には小さなオペラ座（劇場）もある。さらに、セティフからアルジェの間にアスイーフという小さな町があり、食肉の生産で知られる。町には焼き肉のレストランが並び、もうもうと煙を上げている。さながら焼き肉レストランの「秋葉原」といった感じだ。

外国人観光客が多く訪れているチュニジア・チュニス

チュニジアの首都チュニス郊外の保養地シディ・ブ・サイドは、白壁に青の窓枠が美しい街だ。大勢の外国人観光客で賑わっていた。ここを見る限りは「アラブの春」による混乱の影響は感ぜられない。チュニジアのサントロペと呼ばれるハマメットも外国人のリゾート客の姿を多く見ることができた。チュニジアは「エンナフダ」というイスラム政党が与党となったが、20年ぐらい前に訪れた時に比べると、スカーフを着用する女性が増えた。街にゴミが落ちてみると、ベン・アリー政権時代にはこのようなことはなかったという声にも接した。ベン・アリー時代で最も大きな官庁は環境省だったといわれ

るほど、ベン・アリー政権は環境問題に力を入れていた。観光地を見る限りでは、チュニジア社会は予想していたよりも混乱は少ないという印象だった。

チュニジアで最も有名ともいってよい観光地のカルタゴの遺跡は、紀元前814年に現在のレバノンのティルスを拠点とするフェニキア人によって建設された。1979年にユネスコの世界遺産に登録されている。ローマ帝国には、その住民たちはフェニキアから派生した言葉であるポエニ人として知られていた。半島によって囲まれたカルタゴの都市国家は外敵の侵入を防ぐのに適した地理的位置にあった。

古代カルタゴの都市国家の主要な収入は北アフリカや南スペインから採れる銀で、国家の歴史は紀元前800年に遡る。カルタゴは3度にわたるポエニ戦争をローマと戦い、結局紀元前146年に敗れ、略奪や焼き討ちに遭った。

ローマの皇帝シーザー（ガイウス・ユリウス・カエサル：Gaius Iulius Caesar、紀元前100年～紀元前44年）はローマの土地のない住民たちをカルタゴに入植させた。紀元前29年にローマ初代皇帝のアウグストゥスは、カルタゴをローマのアフリカ経営の拠点としたが、今日、私たちが見るカルタゴの遺跡の多くはローマ時代に築かれたものである。5世紀、ヴァンダル族の王ガイセリックがカルタゴを占領してこの地方にヴァンダル王国を建国し、カルタゴはその首都となる。

東ローマ帝国はカルタゴを奪回しようとして失敗を繰り返し、ようやく6世紀になって征服に成功した。しかし、東ローマ帝国は、アラブ人の侵入を防ぐことができず、ウマイヤ朝勢力が670年から683年にかけてカルタゴを攻撃すると陥落した。アラブ人たちはカルタゴには関心をもたず、新しい軍事都市チュニスを建設すると、カルタゴは急速に忘れられ、荒廃していった。

チュニスの歴史的発展

チュニスは、いうまでもなくチュニジアの首都で、最大の都市で地中海に面している。チュニスは紀元前9世紀にリビア人によって建設されたものの、紀元前146年の第三次ポエニ戦争でカルタゴとともに破壊された。その後、チュニスはローマ帝国の下で繁栄したが、ムスリム勢力の進出、さらにアグラブ朝（800年～909年）の首都となり、いっそうの発展を見た。ハフス朝（1236年～1574年）下で極盛期を迎える。1539年に神聖ローマ帝国のカール5世によって征服され、1539年からオスマン帝国の支配下に入った。スペインの統治を受けた時期もあったが、1881年にフランスの保護領になるまでおおよその時期オスマン帝国の支配下にあった。第二次世界大戦中は、1942年にドイツ軍が占領し、1943年にイギリスがドイツから奪還した。1956年にチュニジアが独立すると、正式な首都となった。

織物業、セメント、機械などの産業があり、また毎年7月にカルタゴ・フェスティバルが開かれるように文化都市でもある。迷路のようなメディナという旧市街の中には8世紀に建立されたザイトゥーナ・モスクがある。2000年代中期に市の人口はおおよそ75万人だった。

チュニジアのカルタゴ遺跡の近くにカルタゴ・モスク（旧ベン・アリー・モスク）があり、また近隣に第二次世界大戦で戦死した米兵の墓地がある。ここに眠る米兵は2,840人で、十字架の墓標の中に、ユダヤの星の墓標も交じっている。

第二次世界大戦中、チュニジアなど北アフリカのフランス植民地では自由フランス軍に参加した人々もいたが、その様子は映画「デイズ・オブ・グローリー」（2007年制作のアルジェリア・フランス・モロッコ・ベルギー合作映画。ラシッド・ブシャール監督）などでも描かれた。映画ではムスリムやアフリカ系で構成される部隊がイタリアやフランスのヨーロッパの最前線

に投入されるものの、受勲・昇進はフランス人ばかりで、休暇もない差別的待遇の中で戦う様子が扱われている。

チュニスには1988年4月にパレスチナ解放機構(PLO)の指導者ハリール・アル・ワズィール(アブー・ジハード)がイスラエル軍やモサドによって暗殺されたところでもある。イスラエルはその前年末から始まったパレスチナ人によるインティファダ(蜂起)がアブー・ジハードによって扇動されたものと考え、彼の「抹殺」を考えたが、遠く離れたチュニジアまでやってきて、他国の主権を侵害し、暗殺作戦を行うイスラエルの特殊な安全保障観をあらためて感ぜざるを得なかった。チュニスは、2011年のジャスミン革命後の変化とともに、世界の現代史についても考えをめぐらせるところでもある。

日本との交流を望む国々

1月のイナメナスでの事件を受けてアルジェリアには「危険」というイメージがつきまとうが、既述のように、アルジェリア社会は安定している。1990年代の軍・警察と武装集団の暴力の応酬を受けて、国民の間には武装集団への支持がほとんど見られなくなったし、アルジェリア政府も武装集団のメンバーたちが武器を放棄することの見返りに職や生活扶助を提供して、彼らの社会的統合を図っていった。地元のジャーナリストの話でもアルジェリアの安全は確保されていて国内の移動も問題ないとのことだった。南部の灼熱の砂漠などアルジェリア人は誰も行かず、そこで治安上の問題に遭遇することはないという声もあった。

アルジェリアでは日本人(現地に駐在する日本企業関係者)に対する注文として現地社会により溶け込んでほしいという声にも多く接した。中東イスラム世界では日本政府や企業はリスクに過敏すぎるという評価はずっと聞かれてきた。1月のイナメナスの事件ではアルジェリ

ア政府は犯行グループともっと交渉してもよいのではないかという声もあったが、アルジェでの聞き取りでは圧倒的に政府の措置は適切であったとの声が多かった。こうした武装集団に対する政府・軍の断固たる姿勢もまた暴力を断ち切るのに貢献したことも確かだろう。「イスラム過激派」の活動は、1990年代に10万人余りが犠牲となったために、アルジェリア政府、あるいはアルジェリア国民にとってはトラウマであることは間違いなく、武装集団に対しては厳しい姿勢もやむなしというムードがアルジェリア社会にはある。

他方、チュニジアでも急進的な武装集団の活動が報道されるようになってきているが、チュニジアの主な過激派であるアンサール・アル・シャリーアの活動舞台はもっぱら国外である。

アンサール・アル・シャリーアの主な支持者は教育のない下層階級で、彼らは容易に洗脳できる。組織は、職のない人々に街頭でモノを売るための商品を提供したりしている。シリアで戦う外国人の中で最も多いのはチュニジア人といわれているが、チュニジア人たちはベン・アリー政権時代に抑圧されていて、彼らには一般にアサド政権によって抑圧される人々に同情がある。

しかし、アンサール・アル・シャリーアの考えはチュニジア人のごく一部にしか支持されていない。イスラム政党エンナフダが与党となっているものの、チュニジア人たちは、過激なイデオロギーは望んでいないようで、チュニジアではイスラム武装集団が勢力伸長するとは考えにくい印象をもった。それは、チュニジアがアルジェリアと異なって国土が狭く、制圧に容易ということもある。イスラムの原点に回帰する運動はイスラム世界全体で見られるが、アンサール・アル・シャリーアのような暴力に訴える組織への支持は希薄だ。街頭では政治犯として拘束された芸術家の解放を求める集会を見る

こともできたが、しかしチュニス市内の主要な商業活動の場であるメディアでの活発な商取引の様子などを見ていると、人々の関心は政治ではなく、あくまで日々の生活という印象を受けた。

アルジェリア、チュニジアは冒頭でも述べたように、地中海文化圏であり、イタリア人やギリシア人に似た顔つきの人も多く見られる。アルジェリアはガスなどエネルギー資源の輸出で経済成長があり、アルジェの空港では中国人技術者や労働者たちの姿も見かけた。その一人と話をすると、アルジェにアフリカ最大のモスクを建設しているのだそうだ。アルジェリア経済やその天然資源に中国などアジア諸国も注目し

ている。

チュニジアは、ベン・アリー政権の下でも力を入れてきた観光産業は着実に復活しつつあるという感じで、ヨーロッパ諸国の人々、また日本からの観光客たちも数多く目にすることができた。チュニジア、またアルジェリアとも観光客を招き入れるには魅力的な観光資源も少なからず存在する。治安についてはほとんどまったくないという印象を受けた二国であったが、1月のアルジェリア・イナメナス事件の際にも指摘があったように、日本には確かな情報を集め、これらの国との経済や文化的な交流を図り、国益を確保することが求められているように思った。